（前ページ最下段から）

それがないかぎり石炭産業の現状も、退職者頗発の実態も、CO患者・遺族の将来も、私たち自身の生活と権利も救うことはできないと思うがどうか。

なぜ統一できないか考えよう

古賀書記長　退職者がひきつづいている原因が、わが国の高度経済成長の中でなお石炭産業における賃金の低さ、そこからくる生活苦にあるのはもちろんだが、別の原因が労仂運動からきていることもかくすことはできないだろう。

闘いの展望は、こんどの機関二年制提案に示された第二組合員の気持の変化に見られるように、かなり発展している情勢を的確にとらえながら、将来は第二組合をわが方に合併できるとの確信の上に立って、やっぱり自分たちが統一と団結を強めてゆく以外には開けない。特効薬は見当たらない。

第四次合理化阻止行動の中から、悪い面もたしかに生まれたろう。残業・休日出勤の問題も出ている。しかしお互いの交流を通じて、学び合えたことを忘れてはならず、問題はこのような場合、これからどう指導してゆくかであるし、その点十分検討してゆきたい。

第二組合が会社との間に結んでいる平和協定が問題になっており、差別の問題が出された。もちろん弁護士も呼んで常に相談はしてきているが、根本的にはそのようなことは法廷闘争で打ち破れるものではなく、あくまでも第二組合対策をすすめる中で第二組合員を決起させ、職場闘争をもり上げることにつきると思う。

ストライキの場合、執行委員も賃金カットをすべきではないかとの意見が出された。十分検討したい。むしろこんなことは、皆さんにきめてもらうことこそ第一。

第四次合理化阻止闘争は、もちろんいのちを守る闘いを柱に推進してきた。その後の災害続発についての保安団交も、すでに会社側に申し入れている。だが、団交だけでは会社の態度はのらりくらりを出ない。職場に闘いがあってこそ、はじめて団交を左右することができ、さらには団交が決裂すれば、同時に組合員の怒りが職場に広がり、そのことがまた職場闘争をもりあげる状態をこそつくろうではないか。

第二組合員に犠牲者が出た場合も、統一ストライキをうつ問題は、命を守る闘いをすすめる以上当然決意すべきこと。それでこそ階級的な闘いだといえる。いまの分裂状態をつくり出しているのは資本であり、その差別政策だ。だからわれわれは、それをのりこえて手をにぎり、第二組合員をその中にまきこんで闘うように努力すべきだ。いまや三池労組員だけで闘っても、命は守れぬところにきている。

社共両党と手をにぎって統一戦線を結成すべきではないかという意見があったが、現在の労仂運動の中にはまだそのことは成熟していない。その必要性はよくわかるが、そのことを論ずる段階ではない。なぜそうなのか、考えてほしい。

武松（本所）　統一戦線の機は熟していないというが、政治戦線の統一が労仂者にとってどれほど有利か、東京都知事選挙や沖縄の現実が示している。それがなぜできないのか、わからぬ。

安尾（四山）　もういっぺん「三池と安保」でやるやっか、という声は内部にいっぱいだ。中央段階でやらぬというなら、こっちがまずそれを結成して上に仂きかけてゆくようにしてはどうか。

統一をいう前に反省すべきだ

宮川（四山）　関連して発言したい。さきに荒尾市会議員選挙が行なわれた際、田代候補を出した私たちは、私たちの職場分会で、職場選対を結成する作業に取り組んだ。ところがそのとき、「自分たちは主義主張が違うから」という声が出たため、残念ながら職場選対を確立することができなかった。そういう人たちは、組合推せんとして職場から立候補した仲間を支持せず、統一を自ら放棄したのだ。それどころか、組織のきりくずしではないかと思われる行動さえ行なった。そうしておいて「社共統一でゆこう」といわれるのはわからない。

本当なら統一戦線の問題は、まず労仂組合時限できまったところに従って行動するところからこそ可能となるはず。それなくしては統一戦線は問題にならんではないか。

古賀書記長　統一行動は、過去に幾回となく社共統一で闘った経験をもっている。だが残念ながら、そのために多くの場合かえって組織内部に混乱を招いてきた。力量を高めるための統一が逆に力量を弱めてきた。

理念の上では、民主勢力の統一は当然なはなし。事実また行動方針案も、客観的には統一の方向をめざしていることを認識してもらいたい。

悩み多い〝詩劇活動〟
だが意識の変革めざそう

百田（三川）　私は合唱詩劇運動に参加しているが、保安闘争をいっそう強めるためにこそ、命を守るためにこそがんばっている。

ところが職場の人々はなんといっているだろうか。「まあだやりよるとな」「いつまでやるとな」「だれがせれていうとな」「ものずきはいよっぽどのヒマ人ばかりがやりよるどじゃろ」、そのほかいろいろ。

合唱詩劇運動参加者は、とくべつに生活の苦しい者ばかり。賃金の低い青婦部員をはじめ、そのほか内職の主婦など。自分の病気をおして参加している者、交通事故にあって重態となり、入院した子どもをおいて参加した者、腹部を手術したご主人をほったらかして参加した者、内職から帰って夜ご飯を炊いて、主人と子どもたちについでやった暖いご飯を見ながら、自分は腹をへらしたまま練習にかけつけてくる主婦、あの一二・九大集会での上演がすんで、職場にかけつけたらすでに親方から首になっていたのに、またさがし当てた新しい職場で仂きながらがんばっている人――それでも私たちはやらねばならないことを知っている。合唱詩劇のもつ意義の重大さを、私たち一人一人がつかんでいるからである。

現実に合唱詩劇は、何よりCO患者とその家族の人々に勇気を与え、そこかしこの地に仂く仲間との間に連帯を結び、反合理化闘争の旗を打ち立てた。CO家族会の会長さんは、自分がこの運動に参加していることの意義についていっている――「百のオルグよりも、合唱詩劇一回の公演がどんなに見る人の胸に感動を呼び起こし、心を動かしているかを見ている以上、私は最後までこの詩劇運動の発展に力を尽すつもりである」と。

私たちはこれからもこの運動を積極的に推しすすめ、命を守り、生活と権利を守り、反合理化闘争を強めるためにうったえつづけてゆく決意を固めている。指導部はこのような合唱詩劇活動を、これからの闘いの中でどう位置づけようとしているか、対策を明らかにしてほしい。

澁田次長（組織担当）　合唱詩劇運動という特別な行動に参加している皆さんには、たしかに特別の悩みのあることを察することができる。指導部も含め、組合内部にまだ根強く残っている――仂く者の文化創造活動に対する認識の低さから、活動を軽視する傾向が強いが、しかしますます堕落しつつあるブルジョア文化・資本主義文化と闘うことなしには、仂く者のしあわせもその文化も創造してゆくことは不可能だと知るべきである。

この際合唱詩劇活動に対する組織的理解を深めるために全体で討議を起こしてゆく中で、詩劇活動参加者の皆さんとしても現在の苦悩から脱却して、詩劇活動のあり方をさらに独自的な文化創造の団結体に変革してゆく――そのような努力を強められるよう期待したい。

かろうじて支える生計
代議員がまず先頭に

前川（三川）　私たちはこれまで長く「命を守る闘い」「CO闘争」をやってきた。だが組合員一人ひとりは、家族全体が仂いてかろうじて生計をささえている。

こんな実状の中で私たちはやれ集会、やれ抗議、やれ行動でくらしてきた。もはやこのよう組合活動が、不可能になっていることを知るべきだ。現に組合員の中には「CO闘争ばかりって、生活面をどうするつもりか」「三四ストより時限ストを」「なにかといえば闘争闘争で、せからしか」――といった声がたくさん。やめる人が出るのも当然だ。組合員の現在の生活実態をよく見て闘いをすすめるべきだ。

事故に抗議して打つストライキも結構だが、むしろ事故や災害を未然に防ぐことにもっと力を注ぐべきだと思う。会社が招集する保安会議は保安のことはどうでもよいから、ZD運動をどうすすめるか、生産をどうあげるかに目的をすりかえている。この際組合独自で保安対策をすすめることだと思う。執行部に保安部をつくって、連日坑内を巡回点検する。「ベルトに石炭を積み過ぎてはいないか」「排水はやっているか」と……。保安要求でこそ実力を行使すべきだと思うがどうか。

現実を思うならば

中田（本所）　行動方針は闘いを一つひとつに区切った感じで、一貫性が薄い。情勢分析も敵は追いこまれている。さアいけいけとでもとれて、安慰な感じだ。

現実の闘いがうちつづいている。「ビルド鉱三池」などというのは、企業側のいうことであって実態は私たちが「有職失業者」だということだ。

三池労組として、炭労の組織をどう強化してゆくを、考えるべきではなかったろうか。また、大牟田の現状は、市職、国鉄、全九電、全逓、ハイタクと、組織攻撃がはげしくなっている。明らかに私たちの大牟田の隅ずみまでスッポリと、三井の支配の中に包みこまれている感じである。したがって、ここでも三井とどう対決してゆくか、その点を明らかにすべきと思う。

CO闘争ばかり闘って……という声はもちろん無視できぬ。だがその前に、私たちは思わねばならない――宮島さんのご両親はきっとあの熊大病院の一角で、息子の悲惨な姿を見つめながら死んでゆかれることだろう。CO問題、三井に対する責任追及の問題は、同時に私たちの問題だ。このような視点に立って、闘いの展望を切り開こう。三池闘争の犠牲者――千二百人の人びとは、全国で守る会結成のために闘っている。

朽網（宮浦）　かろうじて食ってゆくために、私たちは真黒になって仂いている。話し合う機会さえない。それでも私たちは創意工風して、この行動方針をどう実践してゆくかについて話し合っている。知り、考え、行動することが大切で、やっぱり執行部がやってくれるんじゃなく、俺たちがやらんなら……と決意すべきだ。

犠牲がたとえ第二組合員であっても、当然ストでも打って抗議すべきだ。それが自分たちの命を守ることになり、労仂条件を向上させる意味にも通じている。

それには表面的な教宣ではダメ。もっとこまかくうったえて、主婦の正しい理解が得られるようにすべきだ。

いまこそ三池の誇りを
もう一度

月野（三川）　先日賃下げ反対、勤務評定反対で闘っている市職の組合員と交流したとき、私はこう聞いた――「この闘いの中でみなさんは労仂者としてどう変わったか」と。市職の人はこたえていった――「これまでは、組合事務所にゆくことともなかった。だがこんどの闘争を契機に、どしどし出はいりするようになった。いまの闘いは、三池闘争そのままだと思う。私たちは闘いを通じて要求の正しさを知り、職制の非人間的な事実も知った。たとえ市長をして白紙撤回させることができないにせよ、労仂者として真に団結できたことこそ、かけがえのない誇りと思っている」と。

私は、労仂者の人間を変えた市職の闘いこそ、本ものの闘いだと思う。ところが私たちは、私たち自身が闘った第四次合理化阻止行動の中でどんなに変わっていったろうか。変わらなかったどころか、その逆だ。

私は仲間たちとともに合唱詩劇活動に参加しているが、仲間たちが口ぐちにいう――「もう、職場がわからなくなった」と。事実、心から話し合うことさえむずかしく、あえて集まりを強行すれば感情的な反撥さえ見られる。バラバラだ。

「もう合唱詩劇なんか、やめてしまえ。闘おうとさえ思えば場所はいっぱいある」――合唱詩劇仲間はいう。

こんな状態の中でも、これまで真赤な旗を高くかかげて闘ってきた三池の誇りをもう一度思い返し、前進すべきだ。苦しい分裂攻撃をかけられているのは、三池ばかりではない。山村労組、ソニー労組、そのほかあらゆる企業の仲間が、非情な資本の分裂攻撃と闘っている。命を守る闘い、生活を守る闘いが広がらぬはずはない。なによりもまず私たち代議員がその気になって闘いを起こしてゆくことで、声だけはダメだと思う。

この現実を闘いに

片山（四山）　方針案にも指摘されているように、権利を守るにはどうしても職場から闘いを起こさなければならない。これこそ反合理化闘争の基礎であり、要求をぶっつけて闘うべきだ。

私は職場で闘った結果、休憩所をつくらせた。その間職制は「処分するぞ」とおどしをかけてきたが、それをはね返して闘った。そのほかいろいろの条件をとった。とくに仲間に対して、職制がおしつけてきた不当配転をはね返すことさえできた。その場合あと一日分の賃金をカットされたままであるが、このような場合組合として救済を考えるべきではないか。

のぞみたいことは、職場闘争をすすめる場合、いま少し指導部として立ち入った指導を行なってもらいたいということである。

宮川（四山）　昨年の第四次合理化阻止行動を、方針案は大きく評価しているが、現実はそのために職場では五人組の会議さえもてなかった。あのとき「もっと残業したい」という声や、「三四ストなら賃金をくれ」の声さえ出た。

（次ページ最上段に）